

方言が亡びるとき

—新聞投書から読み取る方言観の変遷を追う—

熊谷 滋子

目次

1. はじめに
2. 方言をめぐる社会的状況
3. 方言をテーマにしている投書
 3. 1 1955年～1964年
 3. 2 1965年～1974年
 3. 3 1975年～1984年
 3. 4 1985年～1994年
 3. 5 方言問題と投書
4. 方言を利用している投書
5. 女性が方言に関わった投書を書く理由
6. おわりに

1. はじめに

水村美苗の『日本語が亡びるとき』を読み終えたときの印象は強烈である。「英語の世紀」の中の「日本語」に対して、「標準語（もしくは共通語）の世紀」の中の「方言」という違いこそあれ、標準語の世紀となりつつある日本語の方言の現在の行方を、あるいは命運を想像させる。不安と危機感を呼びおこさせるものだ。実際、方言をめぐる状況はいろいろな意味で深刻である。できることとして、さしあたり、新聞投書にみられる方言（問題）を手がかりに、問題の真相に迫っていきたいと考えている。

周知のように、新聞投書は、書かれている時代や社会を映す鏡であり、歴史のあり様に応じて変化していくことは否定できない。そのことを示す分

かりやすい例をひとつあげてみよう。投書の投稿者の性の変化を数字の上からみてみよう。『朝日新聞』（縮刷版）で、2008年と50年前の1958年における、たとえば、10月一ヶ月間に掲載された新聞投書を調べてみると、2008年は、全投書213通のうち、男性の投書は109通（全体の51%）、女性の投書は104通（同48%）であるのに対し、50年前の1958年では、全投書75通のうち、男性のは63通（全体の84%）、女性のは12通（同16%）となっている。2008年では、投書の書き手の性が男女ほぼ半々となっているのに対し、50年前は、8割強が男性で占められている。投書の投稿者の性に注目すると、その時代や社会における男女の置かれた位置づけがかいまみえてくる。戦後、民主主義や男女平等を唱えてきている日本社会において、投書における男女平等化が具体的に進んできていることを示しているかのようにみえる。

今回は、そのような新聞投書を利用して、方言に対する態度や考え方、つまり、方言観が、時代とともにどう変化してきたのか探してみたい。しかも、投稿者の性に注目しつつ、ジェンダーの観点から考察していきたい。

2. 方言をめぐる社会的状況

今でこそ、方言はテレビ番組やマンガ、小説、映画などのメディアで取り上げられ、利用され、地方のみやげものの名づけにも活躍している。このように、方言に商品価値まで生まれるようになってきている。しかし、周知のように、最近まで、方言は標準語とのかかわりにおいて、「よくないもの」「粗野なもの」として周縁におかれてきた。今回は、特に、戦後から1990年代までの新聞投書を通して見えてくる方言観（特に、東北方言にまつわるものを重点的に扱う）を探していきたい¹。

東北方言は、「ズーズー弁」と蔑まれ、時に滑稽に、時には侮蔑的に語られる方言としてよく知られている。東北方言に対する蔑視は以前からあったが、特に大きな契機は、明治期に「教育ある東京人」の言葉づかいを標準語として制度化したことにある²。地理的にも経済的にも中央にある東京からは大きくはずれ、「後退」している東北は、なにかにつけて蔑視されてきたが、言葉づかいもその対象となってきた。東北方言の矯正教育、もしくは撲滅政策は、他の地域の方言と比べて、そのやり方に激しいものがあった。戦後は、民主主義を標榜することになったため、一方的な圧力のもとでの矯正はなくなったものの、全国で通用する「共通語」を用いたコミュニケーションの重要性という新たな課題のもと、矯正教育が事実上行われてきたことは確かである。戦後、集団就職

等で地方から東京へ「上京」する多くの若者が方言でバカにされたり、見下されるなどの深刻な状況が問題となり、1970年代ごろまで、方言研究者は、地元の教育委員会などと共同し、方言の共通語化に向けた提言をしてきている。戦後の方言矯正教育がこのようにやむにやまれぬ状況をなんとかしようとするためであったとすれば、その教育を一概に批判できないとも思われる³。が、一方で、共通語を推進することで、方言や方言話者の気持ちに少なからぬ悪影響をもたらしたことに対する、一定の総括があつてしかるべきであろう。

さらに、明治期の近代化を推し進める中であつて、標準語の制定とともに、「女ことば」への要請も生じ、日本語に対して男女差という発想をもたらし、言葉づかいが「らしさ」というジェンダーに結びついた指標を形成していく。現実にはどれだけの人が実際に使用していたかどうかはともかく（渋谷倫子（2006）によれば、それほどでもなかったという⁴）、「女ことば」は女らしさと結び付けられる記号として流通することになった。そのために、男女差のほとんどない東北方言は、「なまりのあることば」「きたないことば」「粗野なことば」とされるだけでなく、「女らしくないことば」として、その使用が二重に蔑まれるほどになってしまった。結果として、標準語と「女ことば」が、女性の東北方言話者の中に、自身の方言使用をためらわせる大きな要因となってしまった。しかし、このことが実質的に社会問題として生起してくるのは、第二次大戦後である⁵。

戦後の高度経済成長期、経済効率化のため、東京一極集中が推進され、東京を頂点とする都会とそうでない地方との格差がつくられ、あげくに、地理的にも経済的にも周縁に位置づけられた岩手など、「日本のチベット」と揶揄されるまでになったのは、1960年代のことである。そのような背景のもと、集団就職（特別列車が1954年に開始され、1975年に終了）などで、地方から都会へ特に若い働き手が大移動し、その結果、都会の人々と地方の人々が直接接触する機会が増した。そこで、地方出身者は、実際のレベルで方言蔑視を体験することになり、そのせいで、無口になったり、ストレスを抱えたりする、いわゆる「方言コンプレックス」を持つようになる⁶。方言のせいで、事件（自殺、殺傷、殺人など）も発生し、方言問題にからむ深刻な事態がひろがっていったといえる。この点こそ、先にも指摘しておいた共通語化教育を推進しなければならなくなった当時の社会的背景と考えられるだろう。

また、ラジオやテレビの普及によってメディアが浸透し、都会の典型である東京の生活が地方の家庭の茶の間で展開され、地方の者は都会にあこがれる一

方で、地元に対するコンプレックスを強めていった。特に、日本語においては女らしさの象徴である「女ことば」をドラマなどで見聞きするにつれ、(京都方言など一部を除く)方言話者は、自分たちのことばが、女らしくないもののだという意識をもつようになり、都会に出かけたり、都会の人と接する場合には、特に肩身の狭い思いをすることとなる。

本稿は、上述のように大まかに整理した時代背景を念頭に、戦後における共通語教育や東京中心主義的な発想が広く浸透するにつれて、方言話者や共通語話者が方言の置かれた状況をどう認識していったのか、その一端を投書から読み解いていこうとするものである。ちなみに、今回は、1955年から1994年までに掲載された「朝日新聞」(縮刷版)にある新聞投書(「声」欄：毎日7～8通掲載)を中心に上げるが、「朝日新聞」では、その他に、女性のみが投稿できる「ひととき」欄(日曜を除く毎日、1通掲載)があり、それも調査の対象にしている。(本来ならば、「声」と「ひととき」欄を別にして統計処理し、考察すべきであるが、便宜上の理由のみで、今回は一緒にして分析していることをあらかじめお断りしておきたい。たとえ区別して取り上げたとしても、方言をめぐる問題の私見に変更を加える必要もありえない。)

なお、調査した結果、方言に関する投書は全部で72通あり、うち男性の投書が27通(全体の37%)、女性の投書が45通(同62%)あり、女性の投書が男性のそれを上回るものとなっている。結論から言えば、新聞に掲載される投書の投稿者の割合が男女半々となっているごく最近の10年間(つまり、1998年から2008年)を除けば、投稿者の多くが男性だった戦後にあって、方言にまつわるものには、女性の投稿者のものが多く、女性の方が方言の状況に対してより敏感に反応しているように思われる。この点に関しては、あらためて、5で取り上げる。

本稿のここでは、調査対象の時期を10年ごとに区切り、1955年—1964年、1965年—1974年、1975年—1984年、1985年—1994年という4つに分け、年代順に順次考察していきたい。1995年以降については、まだ調査中である。昨今の方言ブーム、方言尊重といったムードの中での方言観をみるためには、1995年以降は重要な時期である。今回の調査結果は、そのための中間報告として提示したい。

以下の叙述では、まず、方言をめぐる投書の形態にみられる(投稿者の性別を含めた)形式的分類を図であらわし、そのあと、投書の内容の特徴を具体例を通して紹介していきたい。

3. 方言をテーマにしている投書

調査対象となった期間中の、方言にかかわる投書は、全体として、表1にまとめたようになっている。

表1 時代ごとの投書数

	1955～64年	1965～74年	1975～84年	1985～1994年	計
女性	9	17	13	6	45
男性	1	21	4	1	27
計	10	38	17	7	72

3. 1. 1955年～1964年：標準語教育の推進、または方言を大切に まず、1955年から1964年にかけての投書のみをみる。表2にまとめた。

表2 1955年～1964年（昭和30年～39年） 計10通

	東北の人	東北方言について	以外	標準語へ矯正を	方言を大切に	蔑視批判	メディア批判	計
女性	4	5	4	4	3	1	1	9
男性	0	1	0	1	0	0	0	1

表2の見方を説明すると、「東北の人」とは、投稿者が東北出身者であり、「東北方言について」とは、東北方言について述べていることを示し、「以外」とは、東北方言以外の方言について述べていることを示している。さらに、「標準語へ矯正を」「方言を大切に」「蔑視批判」「メディア批判」は、いずれも投書の内容を示している。

この時期は、女性による投書がほとんどで、全体として、特に東北の人が東北方言について語っているものが多い。内容としては、東北方言を使う子どもたち（若者を含む）が置かれた社会状況（方言でバカにされる）に対して、標準語教育を推進していくべきだとする意見と、そのような社会状況自体を改善すべきであるとするもの、さらに、不当な方言蔑視に対する異議申し立てを行い、むしろ、方言のよさがあるという意見もある。具体例を紹介すると、「方言を使う少年らに理解を」（1962年4月5日付）という投書では、集団就職などで都会へ向かう若者たちが、「上京」して、一ヶ月、二ヶ月たつうちに、無口に

なっていく、はては実家に戻ってしまったりすることもあるという状況を述べている。この原因には少なくとも、方言蔑視があり、都会の人たちに、少しでも若い方言話者の置かれた状況に理解を示してほしいと訴える。

高度経済成長期をノスタルジックに描き出し、特にその当時(昭和 33 年(1958 年))を体験していない若者たちに人気を博したといわれている 2005 年製作の映画『ALWAYS 三丁目の夕日』において、集団就職で青森から上京してきた学校を卒業したての若い娘が、その方言ゆえにバカにされるものの、近所のタバコ屋の「おばさん」から、自分の方言を大切にしないと励まされる場面がある。まさに、当時はこのようなあたたかい人間関係があったかのような想像を抱かせる。しかし、現実の大方は全く逆であったことは、当時の新聞記事に掲載された悲惨な事件や今回紹介した新聞投書から明らかである。この映画のように、高度経済成長期の日本を回顧し、あの時はよかったとする近年の「昭和」ブームに、方言も一役買っていることが興味深い。これをめぐっては、アンダーソン(2001)が、『想像の共同体』で、共同体を想像する(ナショナリズム)ために重要な鍵を握っている一つがことばであると鋭く指摘していることが想起されてくる。グローバル化が進む昨今、それに呼応するかのようになざまな形態を装ったナショナリズムが志向されているが、方言尊重、方言ブームもその流れの一つの表れにもみえる。いずれにしろ、『ALWAYS 三丁目の夕日』の描かれた昭和 30 年代の日本では、方言尊重といった雰囲気はほとんどなかったといえる。少なくとも、今回扱っている新聞投書は、そのことを物語っている。

女性の投書が圧倒的に多い中、男性からの 1 通の投書が気になる。「ズウズウ弁矯正法」(1958 年 7 月 12 日付)と題されたこの投書は、ズウズウ弁で損をしないために、五十音とアクセントの矯正練習を「ねどこの中」でよいから、やってみることをアドバイスしている。その結果、「ズウズウ弁の悩みと荒い言葉の解消」になり、さらに、「頭脳が訓練され気分転換で」きるとしている。興味深い指摘ではあるが、実際にそれが実効性のあるものかどうかは、アナウンサーにでもなりたい人ならともかく、定かではない。その上でさらに、気づいた点として、ズーズー弁話者の「悩み相談」に対するかれの対応の仕方に、ジェンダー意識が反映している。よく言われていることだが、女性は「悩み」に共感し、男性はアドバイスするというジェンダーパターンがあるが、この投書にもそれがしっかりとみえている。まさにこの、この投書のあり方は、男性の特徴を示すものといえよう。

3. 2. 1965年～1974年：方言を大切に、方言蔑視への批判

1965年から10年間は、方言にまつわる投書が一番多い時期である。表3にまとめている。

表3 1965年～1974年（昭和40年～49年） 計38通

	東北の人	東北方言について	以外	標準語へ矯正を	方言を大切に	蔑視批判	メディア批判(その他)	計
女性	6	8	9	1	7	5	2 (2)	17
男性	4	11	10	1	6	4	4 (6:方言の形式)	21

表3での「メディア批判」の下のカッコ(その他)は、方言の紹介などがもつぱらの投書である。3.1でまとめた時期と同様に、東北方言にまつわる投書も少なくない。さらに、この時期の特徴は、男性の投書が多い点である。この時期は高度経済成長期の、東京を中心とする社会的、政治的状況の影響が大きく表れ、標準語が広く普及するにつれて、方言が蔑視され続け、そして方言が衰退していく時期であったことを示している。方言を大切にしようという論調の投書が男女ともに多い。そして、方言蔑視に対する批判も厳しくなされている。さらに、テレビなどのメディアの普及にともない、メディアにおける安易な方言使用への批判もなされている。

1965年、宮城県出身の佐々木更三が社会党の委員長に就任し、国会という中央の政界で東北方言が使われる機会が増えたことで、それ以前とかわって、東北方言が注目され、語られるようになったのも当時の特徴である。「東北なまりにも魅力」と題する投書(女性、1965年11月6日付)は、若い人も、「委員長のように」東北方言を使ったらいいと述べている⁷。国政レベルでの選挙とかかわって方言が語られるようになった点については、アメリカにおける南部方言の状況と重なることもあるが、ここでは立ち入らない。

男性の投書でも、「方言を大切にしよう」(1966年2月23日付)、「方言は言葉の財産」(1974年7月20日付)、という論調が少なくない。一方では、「方言でも誤りは直せ」(1966年3月1日付)や「共通語話し 方言も使う」(1966年3月1日付)という、東北方言自身の矯正を促すアドバイス調のものがあ、男性的な投書も健全である。「方言」でも「誤り」があるとする発想は、まさに明治期にもあったが、それに共通したまなざしである。また、今ではなじみのあ

る「方言と共通語の使い分け」という語りが、この時期にすでに顔を出している。

「上京」してきた女性たちは、依然として、東北方言に対する根強い蔑視があることを訴える。1つ目として、「ズーズー弁を笑った奥様」(1973年6月8日付)では、かつて夫の会社の同僚の「奥様」たちが、東北出身の投稿者のズーズー弁を笑い、一時ノイローゼ気味にもなったという体験を吐露している。どの地域のことばにもそれぞれの特徴があるのだから、東北弁だけを笑いものにするのはやめてほしいと訴える。都会に暮らす既婚女性は、夫がサラリーマンであれば、いわゆる「男は外で女は内」というこの時期の性別役割分業体制に取り込まれ、専業主婦として家事の一切を切りもりする。そのため、夫の会社やその関係者によくもわるくも縛られた生活を強いられていることが、この投書からうかがえる。夫の同僚の妻たちともかかわらざるをえず、その分、方言蔑視にもさらされてしまうのである。

2つ目は、「いらだたしい標準語意識」(学生、1974年7月13日付)とする投書である。地方から東京の女子大学に入学した投稿者は、その後、妹から人が変わったようだと言われたこと、そして、ことばを標準語にしてしまったことで心を開けなくなってしまったのではないかと危惧する。つまり、この女子学生は、「東京におけることばの共通が、実質的に何をもたらすのか」と鋭い指摘をしている。方言蔑視を助長する標準語意識が実質的に浸透してきたこと社会状況がみえてくる。

さらに、メディアにおける方言使用については、男性からの投書に、「おかしい吾郎の福島弁」(1969年1月29日付)や「お笑いに使うな東北弁」(1969年2月25日付)といったものがある。各家庭に普及してきたテレビを通して聞こえてくる「おかしな」東北方言が極端なステレオタイプ(田舎者とか無学者といったイメージ)を強化し、結果的に東北方言とその話者を笑いものにしていくと指摘している。関西方言に比べ、東北方言については、なぜかその語法等のマスコミ側の調査・研究も(いまだもって)十分ではなく、また不正確であり、その分、作り手の先入観がそのままうちだされてしまい、結局、「おもしろおかしくするためだけに東北弁を使っている例」が多いと批判している。メディアでの東北方言の使用は、今でも笑いの対象として使われることが少なくないが、テレビが各家庭に普及してきた当時、東北方言に対するステレオタイプ化が執拗になされていたことが、投書からよくうかがえる。

3. 3. 1975年～1984年：方言を大切に

この時期の状況を、表4にまとめた。

表4 1975年～1984年（昭和50年～59年）

計 17通

	東北の人	東北方言について	以外	標準語へ 矯正を	方言を 大切に	蔑視批判	メディア批判 (その他)	計
女性	3	4	9	1	9	0	1 (2)	13
男性	1	3	1	0	0	0	3 (1)	4

3. 2でみた1965年からの10年間に比べて、方言に関する投書数が減っている。これは、高度経済成長期における急激な変動がおさまりをみせ、共通語がさらに普及し、一方で、方言や方言を実質的に支えてきた農村の共同体社会が解体し、衰退していったためだと思われる。この時期は、女性による投書が多く、男性からのものはぐっと減っている。このことから、方言に関心をもち続けているのは、女性の方であることが分かる。東北方言以外の方言に関する投書も登場し、方言蔑視などよりも、方言の衰退自体を危惧し、方言のよさを認め、方言を大切にしようという論調が高まりをみせている。または、東京一辺倒の発想に距離をおこうとする意識もかいまみえてくる時期である（例、「東京人のヘリクツに閉口」（女性、1977年7月14日付））。

したがって、この時期の若い人の投書に、方言を大切にしようという思いが強く打ちだされてくる。「方言恥じるより個性尊重したい」（女子高校生、1980年11月5日付）では、修学旅行で京都方面に行ったときに、自身の茨城方言が恥ずかしくなったと話す女性の話を聞き、それほど恥ずかしく思うことはなく、むしろ個性として堂々としているべきだと強調する。また、「方言に感じられる温かさやさしき」（女子大学生、1977年6月16日付）では、東京生まれ、東京育ちの書き手が、方言を持っている人の方をむしろうらやましく感じる（いわゆる、東京コンプレックス）と述べ、二つの日本語を知っているのはすてきなことだと結んでいるが、水村美苗のいう「二重言語者」をおもわせる。いずれも若い女性の投書であり、それまでの社会のあり様に疑問をなげかけたり、新しい価値観を作り上げるなど、創造的な言語活動への息吹がみえてくる投書である。今では、標準語と方言の両方が話せることをバイリンガルだとプラスに価値付けることもあるが、この時期にもそのような発想が若い人に生まれて

きていることを強く印象付けるものである。

しかし、依然として、メディアにおいて東北方言への蔑視があり、そのことについて、「方言を笑いの対象にするな」(1977年2月27日付)という岩手県出身の男性による投書がある。岩手出身の新人歌手をめぐり、歌よりも話し方や方言を「もてあそんでいる」と述べ、なぜ東北弁は笑われなければならないのかと怒りを込めて書いている。メディア批判は、今回の投書全体において、男性の投書に多くみられるものである。

3. 4. 1985年～1994年：方言の発見、標準語教育への異議申し立て

この時期になると、方言自体がいつそう衰退し、方言があまり話題にのぼらなくなってくる。思い出話や旧友との語らい、なつかしきなど、方言の機能が、情報交換から、いわば感情的な交換へと変化してきたことを示すものである。表5にまとめる。

表5 1985年～1994年(昭和60年～平成6年)

計7通

	東北の人	東北方言について	以外	標準語への矯正	方言を大切に	蔑視批判	メディア批判(その他)	計
女性	2	2	4	0	3	1	0 (2)	6
男性	1	1	0	0	1	0	0 (0)	1

この時期の、興味深い投書は、「東北方言に誇りを持とう」(1994年7月22日付)と題するアメリカの大学で言語学を教える教員からのものである。彼女は故郷の秋田に里帰りしたとき、友人たちが方言に劣等感を抱いている姿を目の当りにし、方言も一つの文化なのだから、大切にすべきだと主張している。さらに、「標準語教育が方言締め出す」(1993年9月8日付)という投書では、標準語教育の弊害が方言コンプレックスを助長していると指摘する。まさに、「方言が亡びるとき」に通じていく話かもしれない。いずれも女性の投書である。また、かの児童文学者である国分一太郎の弟である国分正三郎が投書「今こそ造ろうズンミン国」(1988年5月2日付)で、東北方言蔑視にあって、兄が「東北ズンミン国」(ちなみに、「ズンミン」とは周知のように「人民(じんみん)」の東北方言での発音)を造り、「くったくなく暮らしていきたい」と語っていたことを記している。このことに対して、「著名な言語学者」が方言コンプレック

スとのかかわりで、揶揄したことも述べている。

現在は、国語審議会などでも、方言尊重を唱えているが、このような投書を見る限り、また、今あらためて日本全体を見渡してみると、注1で指摘したように、東北方言に対する「尊重」は、依然として、実感できる状況にない。ことが亡びるときは、蔑視の陰から音もなくやってきているかもしれない。

3. 5. 方言問題と投書

方言にまつわる投書を時代区分ごとに順次紹介し、その特徴をあげてきたが、ここで、煩瑣ながら再度それらをまとめつつ、若干のコメントも加えておきたい。

東北方言が、1955年から1974年にかけて、方言の中でも強く蔑視され、そのことで注目された方言であったことが分かる。そして、方言に関する投書は、高度経済成長期の1960年代に集中している。今回の調査対象の期間中の統計では、女性の投書の方が多いが、この時期だけは、男性の投書が多く、時代背景の社会的変動ともない起きてきた方言問題への関心の高まりがうかがわれる。この理由としては、集団就職や進学などで、地方の若者が多く「上京」し、また、テレビなどのメディアの発達によって、東京中心の発想が地方に伝えられ、「洗練された都会」対「遅れた田舎」という構図が生み出されていった時期にあたり、それにともなって、方言が「(遅れた)田舎」を示す記号として強くあったということがうかがわれる。

都会と田舎の格差が拡大し、とりわけ岩手県が前述したように「日本のチベット」や「陸の孤島」などと象徴的に称され、大いに蔑視された時期である。僻地教育や辺地教育などもさかんに行われ、教育研究のために、岩手の「僻地」に調査に訪れる大学関係者(学生も含む)が少なくなかった。そこでも、「一番苦しんだのは言葉の強いなまり」として、現地の方言が分からなかったことが記事になったりしている(「この目で触れる農村：東大で岩手県を調査」「朝日新聞」1958年7月16日付)。このような一連の調査研究をめぐり、「「辺地教育」は慎重に」(1965年7月9日付)という岩手県在住の男性からの投書では、「辺地」の子どもたちはモルモットの代用ではないと厳しく批判している。これは、あたかも、サイド(1993)のいう「オリエンタリズム」につらなる視線に気づいているからではないかと思わせる。サイドによれば「オリエンタリズムとは、オリエントを支配し再構成し威圧するための西洋の様式なのである」(p.21)と定義づけている。岩手という後進地域の「オリエント」を、「辺地教育」と称

して干渉し、コントロールしようとする「西洋」（進んだ「東京などの中央」）の視線を、その投稿者は感じたのではないだろうか⁸。

第二に、とりわけ、女性の方が方言についてコンスタントに投書で取り上げているということである。方言にはられたマイナスイメージに対して、全体として、女性が異論を唱えたいという思いを伝えている。時代区分ごとにいえば、1955年から1974年までは、地方の若者が都会に出ても不利にならないように、標準語教育を推進するのはいいことだという論調もある一方、方言がないがしろにされることへの違和感を女性たちは述べている。ともあれ、女性の方が方言問題に関心が高い。理由の一つとして、言葉づかいについて世間から注意を受けたり、子どもとの関わりを強く持たされてきたのが女性だったからではないかと考える。たとえば、集団就職等で生じた方言問題を扱う記事が、もっぱら「家庭欄」（今は、「生活欄」とされている）で掲載されていたことからいえる。たとえば、方言を扱った特集記事のタイトルをあげると、「笑いものにならないで」（1964年11月7日付）や「方言だって日本語だ」（同年12月2日付）、「方言に気がひける」（身上相談、1965年4月16日付）、「田舎に帰った“金の卵”—バカにされたなまり」（1970年4月16日付）などある。地方から「上京」してきた若者たちの抱える方言コンプレックスがいかに深刻なものだったのかがえる。

1965年以降は、男女とも傾向的に方言を大切にすべきであるという論調の投書が多く、1975年以降になると、今度は、東京中心主義的、共通語中心主義的な見方に対して、一定の距離をおこうとするものが出てくる。さらには、方言が話せるほうがむしろいいとする、新たな価値観を抱く内容のものまで登場してきた。

以上、方言にまつわる投書について、時代区分にそってコメントを加えつつ、特徴をまとめてきたが、地域に深く結びついた文化の一つである方言が、戦後の東京中心主義的な社会状況の、標準語・共通語教育やメディアなどが推進され、浸透する中であって、特に東北方言が強く蔑視され、笑いの対象にされてきた現実、投書を通して、特に女性が異議申し立てを行なってきたことが読み取れるのだ。この点については、さらに、5で考察する。その前に、方言を利用して書いている投書を取り上げ、議論していきたい。

4. 方言を使用している投書

3では、方言蔑視や方言の再評価など方言をテーマとした投書の特徴について

みてきたが、ここでは、方言そのものを実際に使用して書かれた投書を調べていく。3と同様に、女性の投書の方が方言を利用して書かれている。問題は投書の内容分析なのだが、一応3と同様に、時代区分ごとに、男女の投稿数をそれぞれ表6と表7にまとめる（これについては、特に、内訳として「ひととき」欄での投書数もあげておく。方言使用に関して、特に、欄の特徴と関わってくるものと考えからである）。

表6 方言を利用した女性の投書数

	東北の人	東北方言	それ以外	計	内「ひととき」欄
1955年～1964年	6	8	0	8	8
1965年～1974年	5	6	5	11	8
1975年～1984年	1	3	8	11	8
1985年～1994年	3	4	3	7	6
合計	15	21	16	37	30

表7 方言を利用した男性の投書数

	東北の人	東北方言	それ以外	計
1955年～1964年	0	0	0	0
1965年～1974年	2	2	0	2
1975年～1984年	1	1	0	1
1985年～1994年	0	0	0	0
合計	3	3	0	3

方言を使用している全投書40通のうち、女性の投書は37通（全体の92%）、男性の投書は3通（同7%）であり、圧倒的に女性のものが多い。さらにいうならば、女性の投書でも、女性のみが投稿できる「ひととき」欄での投書が女性の投書全体の81%にあたる30通であった。この点に関連して、1955年から1974年にかけて、東北の人が東北方言で書く投書が多いことが特徴である（カッコ内の最初は、投稿者の居住する県名を指している）。たとえば、「子どもの言葉から」（福島、1956年9月18日付）や、「夜あつまるべえ」（山形、1958年2月27日付）「田んぼのひる休みに」（山形、1960年6月5日付）、「素朴な田舎の子らの文集」（岩手、1962年7月8日付）、「秋田のおんな」（秋田、1963年6月28日付）など、主に農村地帯の女性たちが、地元の人々との交流、子どもたちの様子などを方言を使って生き生きと描いている。これは、方言を使わずにはそ

の雰囲気、気持ちが伝えることができないという、方言独特の力を強く感じさせるものとなっている（ちなみに、方言は話しことばであり、一般的に女性の方が話しことばを投書に利用する傾向にあることと一致する⁹⁾）。

経済的に右肩上がりの変化の激しい時期の日本社会にあって、東京中心、都会中心の発想が重視され、それに呼応して、農村地帯の「遅れ」が強調される中において、地元の女性たちは、なじんできたものの象徴の一つである方言によって、自らのことを考え、表現していこうとしていたのではないだろうか。テレビなどから流れてくる都会の「洗練された主婦」（イメージ）とは別世界で生きている女性たちの思いが方言を介して表現されている。3で扱ったような、強く蔑視されてしまっている東北方言をむしろ積極的に使用することで、主張したいことがあったのだ。この点については、次で考察する。

男性の投書では、そのような心情が方言で語られることが少なく、ここにも一種のジェンダーが存在していると考えられる。

5. 女性が方言に関わった投書を書く理由

すでに何度か指摘してきたことだが、女性の方が、方言を扱ったり、利用して新聞投書を書くことへの理由を、あらためて取り上げ、考えてみたい。

この理由として、ありきたりな言い方になるが、女性が言葉づかいで、女らしさを強制されてきたことが大きかったのではないかと考えられる。しかし、なぜ、「女らしくない」とされる、性差の少ない方言を女性の方が用いるのだろうか。

遠藤織枝(1994:19)がまとめているように、女性は、言葉づかいについて、「古くは平安期から近世近代と、いつの時代にも、その逸脱をとがめられ、教えさとされる対象であった。そして、昭和に入り、現代に至るまでも、折にふれては論じられてきた」という歴史的社会的な背景がある。家庭や学校、そして社会人となってからも、女性は常に、言葉づかいについて何らかの注意をされ、その分、ことばに敏感になっている。特に、男性や年上の人に対するときには、なおさらである。その証拠に、女性同士で、うちとけた間柄では特に、かなり自由なことばを使っている。そして、そのことを女性たちは知っている。女性同士の自由な会話を耳にした男性が、女性のことばが乱れている、もしくは男性化しているとなげくことがよくある¹⁰⁾。また、育児の面でも、女性は、子どもに対することばのしつけ役としても期待されている。

さらに考えられうることは、2でも述べておいたように、実際には、それまで

どれだけ使用されていたのか不明であるにもかかわらず、明治以降、日本語に男女差が求められ、つくられた「女ことば」が社会的な規範や知識として全国に流布され推進されていった。そのうち女性たちは、どのような地域に住んでいようとも、メディアから流れてくる「女ことば」をいつの間にか自然なものとして、違和感を持つこともなく、受け入れるようになる。女性の方言話者は、標準語のみならず、「女ことば」からも遠く置かれ、疎外感を味あわされていく（京都方言など一部の方言を除けば、特に、東北方言話者である農村地帯の女性たちの疎外感には深いものがある）。水村美苗は、『日本語が亡びるとき』において、明治期の日本近代文学を再評価すべきだと述べているが、言文一致のもと、当時の作家たちが使用しはじめ今日でも利用されている「女ことば」の社会的影響については、どう考えているのだろうか。

しかし、女性はことばの面での女らしさを強制され、自身の方言が疎外されることが、逆に、「女ことば」のもつ人工的な香り、嘘くささ、欺瞞性（特に商業的、役所的、さらには国会議員らが国民に向けて主張するとき用いる過剰な敬語表現にまわりつくニュアンスを想起していただきたい）にも鋭く気づくことにもなっていく¹¹。すでに指摘したことだが、女性同士の会話では、通常、「女ことば」規範、または丁寧な話し方からはずれていることが少なくない。むしろ、はずれている方が普通なのではないだろうか。女性が女性に対して、女らしさを発揮することがあれば、むしろ、しらじらしさや欺瞞的な香りをたがいに感じているはずだ。永井愛の『ら抜き殺意』が見事にそのことを伝えている（女らしさとは、一体誰に、何に対して示すものかという点については、ここでは、深く立ち入らない）。

今回調査した方言を利用した女性の投書の81%が、女性のみが投稿できる「ひととき」欄に掲載されている投書であったことを考えれば、以上のことは容易に納得できることではないだろうか。むしろ女性たちは、方言を使うことで、女らしさ、もしくは、「女ことば」規範に対して、一種の異議申し立てを行っていると感じるのである。

ちなみに、水俣病を社会に告発してきた石牟礼道子は、「朝日新聞」のインタビュー記事で、方言について次のように語っている。一部、抜粋したい。

人様を思いやる倫理の高さというか深さは、純然たる方言の世界にありましたから。自分の思いを標準語に置き換えて出すと、もともと持っていた情感みたいなものが抜け落ちてしまう。心を表現するのに、ことばはとても大切です。

だから、方言を大事にしたい。

(「朝日新聞」2008年12月6日付)

女性である石牟礼の率直なことばは、今回調査した結果みえてきた、女性の投書に方言が多く使われていることを説明するもっとも適切なものではないかと思っている。女性の方が、石牟礼の感じている方言に対する思いに共通する感覚を持ち合わせているのではないだろうか。

6. おわりに

論点が重なり、叙述もそのため重複が多い本稿の全体を、あらためて締めくくる必要もないことだが、方言と女性との関わりについては、自分自身のあり方に引きつけて一言さらにつけ加えたい。

近年、標準語・共通語政策やメディアの発達によって、その運命を予言するかのように、方言が周縁においやられたり、ある場面では、もてはやされたりもしているが、方言を扱った新聞投書の変遷をみてくると、女性たちは方言のおかれている状況を目の当たりにし、方言に共感し、方言によって考え、表現しようとしてきたことが感じられる。ナショナリズムへの礎とか、保守的な伝統としての方言ではなく、市場経済中心的社会変化の中で、人間の営みにおいて決してなくてはならないものを伝達することとしての方言の重要性を、女性たちはかみしめているからではないだろうか。上述したことでもあるが、本稿冒頭に掲げた『日本語が亡びるとき』では、日本語の、あるいは日本近代文学における日本語のジェンダー問題に触れられることはなかったが、東京生まれの著者はどのように認識しているのだろうか。岩手出身であること、岩手方言話者であることに意味を見出さざるをえなかった私は、今回、新聞投書に書かれたものを読みながら、あらためて、方言の意味を教えてもらったような気がする。今後も、方言がよくもわるくも社会的に意味づけされている限り、方言について考え続けていきたいと考えている。

注

1. 私のクラスで提出された(特に女子)大学生のレポートなどには、今でも東北方言に対して、否定的なコメントが少なくない。例えば、東北方言話者は、自分の方言を隠そうとしている、直そうとしているように見える、または、「訛っ

ていない」と言われてしまうといったコメントがある。今日の方言ブームにおいても、東北方言に対するイメージは、あまりいいものとはいえない、もしくは、ステレオタイプ化が激しいといえよう。

2. 藪田貫 (1998:94～95) は、東北方言は「野鄙なる俗辞」として、他の方言からみても劣っているとする見方、つまり、方言間の序列化は、幕末期に始まったと指摘している。

3. 共通語化への取り組みとして、例えば、日野資純 (1984) では、青森方言の共通語化として、発音については、7つの公式をたて、アクセントについては、唱歌や童謡などを用いて行うことを提案している。あとがきに、共通語化への切実な動機について、氏の二入の息子さんの「青森方言化」を食い止めるためだったと記している。しかし、結局、食い止められたのは、(公式や歌の利用ではなく)「非ブズー弁地域」の静岡県に移った結果かもしれないと結んでいる (p.289)。

また、藤原与一 (1977) は、方言蔑視を戒めつつも、方言をあくまで生活語として認め、「無分別な郷土弁まる出しはよくない」(p.305)と主張する(さらに、藤原与一 (1975) では、各方言の共通語教育の実践例を示している)。いずれにしても、「国民総体の言語生活の永遠性・文化性を予定して、標準語体系は、密度たかく設定せられるべきである」(p.325)と標準語化を推進しようとしている。そうしなければ、「固定的な現方言生活は(中略)閉塞の世界」(p.301)であるからと指摘している。いずれにしても、1970年代までは、このような方言の矯正を是認し、推進するような方言観をもっていたことは確認しておきたい。

藤原氏が、その著書『私たちの国語』で、方言の完全な復権を提唱していることから、中村桃子 (2007:303～4) は、当時の国語学者の間に、人権としての方言話者への配慮がなされるようになったからではないかと考察している。しかし、私は、方言の復権という主張は、必ずしも、方言話者の人権を尊重しているとはいいきれず、むしろ、ナショナリズム(日本の伝統としてのよりどころとして)の一つの表れとして語られているのではないかと考えている。

4. 渋谷倫子 (2006:54) は、「てよだわ」は必ずしも日常使われていた言語ではなく、「女学生というモダンな教育を受けた若い女性たちの使う言語」という記号だったのではないかと指摘している。

5. 言葉づかいに女らしさが求められ、女性はもともと丁寧な言葉づかいをするものだという主張がかってなされたりすることもあった。たとえば、金田一京助 (1948) は、敬語と婦人語との密接な関わりを述べている。「敬語法といふ

ものは、女性語と切っても切れない関係があるもので、寧ろ女性語から、敬語法が発生したと云ってよいのである」(p.91)とまで述べている。

6. 柴田武(1958)による名づけである。

7. しかし、東北方言で政治を語ることは、好意的には受け取られていない状況は比較的最近までであった。当時参議院議員であった中山千夏が、「朝日新聞」のコラム「鏡の国のアリス」において、1982年3月31日の本会議場のやりとりの様子をレポートしている(「朝日新聞」1982年4月10日付)。その中に、東北方言について書かれているものがある。宮城選出の自民党議員の訛りがきつく、「措置」「慎重審議」などの単語を大汗をかいて読み上げて終わろうとするときに、「おーい、日本語でやれ、日本語で」とヤジる議員が少なくないことを憂えている。21世紀を迎えた今日、共通語が普及し、また、地方選出とはいえ、東京中心の生活をしてきた議員も少なくないために、当時のような極端な「訛り」が国会中継から流れてくることはなくなった。2009年、何かと話題になっている民主党議員小沢一郎は、岩手県奥州市(旧水沢市)の出身だが、イントネーションに多少の特徴があるだけで、東北出身者であることがそれほど明らかではない。もし、今、議会で典型的な東北「訛り」が聞こえてきたら、今の議員はどういう反応をするだろうか。そして、私たちは。

8. これに関連して、方言研究の大家であり、社会言語学者でもある柴田武(1961:49)が、「岩手県でも最も辺鄙な岩泉町付近—ここは最近では「日本のチベット」と言われたりする—に、筆者は非ブズー弁の集落を発見した」と述べているが、まさに、このような発想が戦後の高度経済成長期における田舎に対する率直な感情であったといえる。

9. 島崎洵子(2008:25)では、新聞投書の文体について調べた結果、会話調の表現に関しては、男性より女性の方が使用すると指摘している。

10. 土屋信一(2009:370)は、戦後、女性の言葉づかいが乱暴になったと言われていることについて、むしろ性差の少ない江戸語の使われていた、「江戸時代に戻った」と興味深い、奇妙な考察をしている。土屋(2009)は、女性の言葉づかいが、明治から第二次世界大戦敗戦時までは「乱暴ではなかった」ということを想定している。が、はたして、そうだろうか。いずれにしろ、会話資料が不足する時代の話し言葉の実態を推測することは難しく、少なくとも小説やシナリオをよりどころとして証拠だてるのは誤解を招くと思われる。現在でも、小説やシナリオの多くは「女ことば」で書かれているが、実際に使用されている女性の一般の会話は、そうではないからである。ましてや、女性の方言話者

の言葉づかいについて、具体的にどうであるのかは、さらなる考察の必要が求められる。

11. NHK 教育で放送された高校生によるビデオ作品のうち、福島県立南会津高校の「オレオレ詐欺!？」(約8分)でのインタビューが面白い(2007年8月13日放送)。この地域では、自称詞として、男女ともに「オレ」を用いるが、女子高校生に「オレ」を使うときはどんなどきかと尋ねてみると、自分の本当の気持ちを言うときだという返事がくる。方言の方が、本音を伝えることができるのだ。

参考文献

アンダーソン、ベネディクト(2001)白石さや、白石隆訳『想像の共同体』NTT出版。

井上史雄(2007)『変わる方言 動く標準語』ちくま新書。

遠藤織枝(1994)「若い女性のことば—論評で綴るその昭和史」『日本語学』10月号、明治書院、19—32。

金田一京助(1948)『国語の進路』京都印書館。

小林隆、篠崎晃一、大西拓一郎編(1995)『方言の現在』明治書院。

サイド、エドワード(1993)板垣雄三・杉田英明監修 今沢紀子訳『オリエンタリズム 上』平凡社。

柴田武(1958)『日本の方言』岩波新書。

柴田武(1961)「ズーズー弁でない東北方言」『国語学研究』1、東北大学文学部、1—6。

渋谷倫子(2006)「日本語における「近代的」セクシュアリティの形成」『ジェンダー史学』2号、49—61。

島崎洵子(2008)「新聞投書の文体分析」『言語文化研究所年報』第19号、武庫川女子大学、5—35。

土屋信一(2009)『江戸語・東京語—共通語への道』勉誠出版。

永井愛(1998)『ら抜き殺意』而立書房。

中村桃子(2007)『「女ことば」はつくられる』ひつじ書房。

藤原与一(1962)『私たちの国語』筑摩書房。

藤原与一(1975)『方言生活指導論』三省堂。

藤原与一(1977)「方言と標準語」『岩波講座日本語11』岩波書店、295—325。

日野資純（1984）『方言学論考』東宛社。

水村美苗（2008）『日本語が亡びるとき』筑摩書房。

安田敏朗（1999）『〈国語〉と〈方言〉のあいだ』人文書院。

藪田貫（1998）「〈言語と社会〉からみた近世～近代の移行」『歴史の方法2 都市と言語』青木書店。